

アルカディアの声*

—ウエルギリウス『牧歌』第七歌での中間態的語法について—

川 端 康 雄**

I はじめに

アルカディア Arcadia がウエルギリウス Publius Vergilius Maro (B.C.70~19) によって発見されたということが指摘されて久しい。

むろんそのアルカディアとは「ギリシア南部、ペロポネソス半島中央部の山の多い地域」と定義される地理上の現実の土地を指すのではない。牧人たちの恋と詩歌の国、牧歌的な理想郷として虚構化されたアルカディアのことである。大体、現実のアルカディアは、理想郷には程遠い。その出身者である歴史家ポリュビオス Polybios (B.C.200 頃~120頃) は住民の素朴な敬神と音楽への愛好を指摘しつつも、生活の楽しみが少ない、瘦せて岩だらけの荒涼とした土地として故郷を描いたのであり、田園詩、牧歌詩の祖たるテオクリトス Theocritus (B.C. 3世紀前半) を初めとして、現実のアルカディアを知るギリシアの詩人たちが田園詩を書くときには当然ながらその舞台からアルカディアを除外した。ウエルギリウスが手本としたテオクリトスの『牧歌』では、舞台の多くはシケリア(シチリア)に設定されている。

そのアルカディアをウエルギリウスが理想的な「ロクス・アモエヌス」locus amoenus⁽¹⁾に、すなわち「快き場所」に変貌せしめた。素朴で古風な経済生活、歌の愛好といった現実のアルカディアを強調したばかりでない。豎琴を発明したヘルメース神、シューリンクス笛を発明した牧神パーンの故郷という神話的背景を利用しただけでもない。パノフスキーが指摘したように、それに加えてウエルギリウスは「現実のアルカディアが決してもったことのない、緑したたる草木、永遠の春、飽くなき愛の逸楽、といった魅力をもつけ加えた」⁽²⁾のである。したがって、最初にブルーノ・スネルの表現を借りて、アルカディアがウエルギリウスによって「発見」されたと書いたけれども⁽³⁾、「創造」されたとする方が実はずっと正確なのである。それが最初になされたのは、つまり、牧歌的神話 pastoral myth と不可分に結び付いたロクス・アモエヌスとしての虚構のアルカディアがウエルギリウスによって創造されたのは、紀元前30年代に発表された彼の『牧歌』*Bucolica* (別名『詩選』*Eclogae*) においてだった⁽⁴⁾。その第七歌の冒頭部分、牧人メリボエウス Meliboeus の台詞にアルカディアの名が Arcades (アルカディア人) の形で出てくる。

* VOX ARCADICA : inquisitio grammatica in usum generis medii in septima Vergili Ecloga

**Yasuo KAWABATA 教養学科所属

Forte sub arguta conederat ilice Daphnis,
 compulerantque greges Corydon et Thyrsis in unum,
 Thyrsis ouis, Corydon distentas lacte capellas,
 ambo florentes aetatibus, Arcades ambo,
 et cantare pares et respondere parati. (*Bucol.* 7.1-5.)

たまたま、さやさやと鳴る櫛の木の下にダプニスが座っていた、
 そしてコリュドーンとテュルススが家畜の群れをひとつにまとめていた、
 テュルススは羊を、コリュドーンは乳ではちきれんばかりの雌山羊を、
 二人とも花盛りの年頃、二人ともアルカディア人だ、
 歌の技量は同等、返歌の備えもできている。

歌において卓越した山羊飼いコリュドーンと羊飼いテュルススとの「大試合」*certamen magnum* (16行) が、おそらくダプニスを審判として、これから始まる。メリボエウスは偶然に開始前にその場に入ってきたのだった。そんなメリボエウスを見て、ダプニスは、「少し休めるのなら、木陰で休憩なさい」*si quid cessare potes, requiesce sub umbra* (10行) と誘う。なにしろ季節は初夏で、ここは気持ちがい場所だ。君の山羊も心配ない。子牛だって大丈夫。

huc ipsi potum uenient per prata iuueni,
 hic viridis tenera praetexit harundine ripas
 Mincius eque sacra resonant examina quercu. (7. 11—13行)

ここに、〔君の〕子牛らは自分で水を飲みに牧草地を通過してやって来るだろう。
 ここでは、ミンキウス川が緑の岸辺を柔らかい葦で縁どり、
 聖なる柏の木から蜂の群れが羽音を発している。

このようなダプニスの誘いを受けたメリボエウスは、「自分には家で乳離れした小羊たちを囲いに入れてくれるアルキッペーもピュリスもいなかった」*neque ego Alcippen, nec Phylida habebam, / depulsos a lacte domi quae clauderet agnos* (14—15行) わけなので別段暇というわけでもないらしいが、「それでも私は自分の仕事より彼らの競技を優先させた」*post-habui tamen illorum mea seria ludo* (17行)。腰を下ろして、歌合戦を見物するのである。こうして、この「快き場所」というトポスを十分に意識させられた状態で、メリボエウスの回想という形でわれら読者も、二人の「アルカディア人」の歌合戦に耳を傾けることになる。第七歌はそんな構成になっている。

ところで13行目に見える「ミンキウス川」は、ポー河の支流で北イタリアのマントヴァの近郊、つまりウェルギリウスの故郷と思われる土地の辺りを流れる川の名称である。この一語から、第七歌の舞台が北イタリアの田園地方に設定されていると見ることも一応できる。作者が幼少時や青年期を過ごした土地についての思い出、もしくは憧憬がこの詩篇における牧歌的風

景の叙述に重要な貢献をなしているのかもしれない。

しかしながら、これ以外で北イタリアと特定できる語は見当たらないし⁽⁵⁾、むしろこのラテン詩に頻繁に見られるギリシア語の人名や地名の使用、標準的なラテン文の規範からおそらく逸脱する疑似ギリシア語的構文法の援用、さらにギリシアの神々の言及などによって、ここで描かれた世界が牧歌的神話の舞台たる理想のアルカディアの次元を獲得しているといつてよい。例えば、第七歌の登場人物であるメリポエウス、ダブニス、コリュドーン、テュルススといった名前はテオクリトスから借用したギリシア名であるが、それがラテン語の韻文のなかに入り込むことによってテオクリトスの牧歌になかった独特のニュアンスを醸し出している。少なくともウェルギリウスの時代のローマ人にとっては確かにそうであったのだろうが、ラテン詩の文脈のなかでギリシア語が出てくるときには、動植物名ばかりでなく登場人物の名前でさえ、非現実的な、はるか遠い雰囲気暗示したことでであろう。特に対格によく見られるが、Daphnin (7行) Alcippen, Phyllida (14行), Thyrsin (69行)のごとく、ギリシア人名をしばしばラテン語変格にせずにあえてギリシア語変格のままにして使っているのは、その辺りの事情を意識した仕掛けであるといえる。アルカディアという地名についてもおそらく同様のことが言えて、古代ローマ人はその現実の土地についての実際的な解釈を受けつけずにいるのに十分なほど遠く離れた場所に住んでおり、それでいてその地は彼らの内的経験に直接訴えるだけの視覚的な具体性を備えてもいたと思われる⁽⁶⁾。上で引用した4行目に出てくる Arcades (アルカディア人) が韻律の点から言って明らかにラテン語ではなくギリシア語名詞 *Ἀρκάδες* として前景化されている事実も注目しておきたい。ここは「アルカデース」でなく、「アルカデス」と読まれなければならない⁽⁷⁾。最後の音節の短さが逆にアルカディアの遠さを示唆しているのだ。そしてこの手法もウェルギリウスの場合決して珍しいものではない⁽⁸⁾。

以上はラテン文における「ギリシア語法」、つまり英語で「グリーシズム」Graecism とか「ヘレニズム」Hellenism などと呼ぶ、ギリシア語特有の語法の模倣、もしくはその修辭的な活用の部類に入るものと見ることができる⁽⁹⁾。さらにこの「ギリシア語法」のうちに加えてよいと思われる表現が、同じく第七歌のコリュドーンとテュルススの歌くらべのくだりに出てくる。二人がそれぞれ最初の歌を交わしたあとの二順目、コリュドーンはこう歌う。

Saetosi caput hoc apri tibi, Delia, paruus
et ramosa Micon uiuacis cornua cerui.
si proprium hoc fuerit, leui de marmore tota
puniceo stabis suras euincta coturno. (29—32行)

デーロスの女神〔アルテミス〕よ。若きミコンが、貴方にこの
剛毛のある猪の頭と、長命の雄鹿の枝状の角を捧げましょう。
これが自分のものとなったあかつきには、滑らかな大理石で
ふくらはぎを紫のブーツで包んだ貴方の全身像を作ってさしあげましょう。

この最後の32行の suras euincta の表現は、その構文ゆえにギリシア語の気分を十分に

つ。euincta は euincio (「しぼる」, 「巻き付ける」) の完了分詞であるが、これを動詞の中間態的語法と考える根拠が十分にあるからである。あるいは、中間態とみなさずに、evincta を普通の受動態完了分詞と理解した場合でも、今度は suras (女性名詞 sura 「ふくらはぎ」) の複数対格) を「限定の対格」すなわち「ギリシア式対格」と取る解釈が強まってくるからである。

どうしてそのような取り方が可能であるのか。なぜそれが「ギリシア語風」だといえるのか。特に前者の中間態の用法に力点を置いて、以下、それを明らかにしていきたい。そのために、事の順序としては、古典ギリシア語の中間態の用法の説明から始める必要がある。おおむね初歩的な文法事項に属する話でいささか気が引けるのだけれども、かいつまんで説明しよう。

II ギリシア語の中間態⁽¹⁰⁾

II-1 「第三の態」

文法用語の「態」を最初に定義しておく、これは英語の voice にあたる概念であって、「動詞が含意する動作と動作主体との関係を示す、動詞の形態」をいう⁽¹¹⁾。英語を初めとする近代語の「学校文法」のレベルでは通常、「能動態」active voice と「受動態」passive voice の区別だけで説明される。例えば、

- (1) a) The people make laws. (国民が法を作る。)
 b) Laws are made by the people. (法は国民によって作られる。)

a) の make は直説法能動態 3 人称複数形であり、主語の「国民」が「法を作る」という行為の動作主であることを示し、逆に b) の are made は直説法受動態 3 人称複数形で、主語の「法」が「作る」という動作を受けるものであることを示している。古典ラテン語の場合でも、後に述べる例外を除いて基本的にこの二分法でシンタクスが論じられており、実際、ラテン語入門書では動詞の説明の最初に「ラテン語の態には能動態と受動態の二つがある」と明記されるのが常である。(1)の能動文と受動文を次のようにそのままラテン語に直訳できる。

- (2) a) Populus statuit leges.
 b) Leges statuuntur a populo.

ところがギリシア語の場合は、能動態と受動態のほかに、第三の態として中間態 (Lat. medium ; Eng. middle voice) を有する。その名称自体に示されているように、中間態は能動態と受動態との間の中間的な機能をもつ態だとひとまず言える。語形態は、未来とアオリストの両時称を例外として受動態と同型であるのだが、意味はむしろ能動態に近い。中間態にしか活用しない動詞のなかには、意味がほとんど能動と同じで、中間態と能動態の区別が機能の相違よりも慣用にすぎぬ場合もしばしば見られる。しかし次の点で意義上中間態は能動態と区別することができる。すなわち、どちらかというとな能動態が動作を客観的に提示するのに比べて、中間態は動作が動作主体と特別な関係を結んでなされることを示している、という点である。(1)の能動態と受動態の例文をギリシア語に訳し、それに中間態を含む文 c) を加えてみよう。

(3) a) ὁ δῆμος τίθηται νόμους.

(τίθηται = τίθημι [置く, 設ける] の直説法能動態現在 3 人称単数形)

b) οἱ νόμοι τίθενται ὑπὸ τοῦ δήμου.

(τίθενται = τίθημι の直説法受動態現在 3 人称複数形)

c) ὁ δῆμος τίθεται νόμους.

(τίθεται = τίθημι の直説法中間態現在 3 人称単数形)

前述のように、直説法現在の受動態と中間態は同型であるから、b) の τίθενται が受動態で c) の τίθεται が中間態だというのは文脈からのみ判断できることである。さて、(3) の a) と c) の文を比較してみよう。両者は主語として男性単数主格の ὁ δῆμος (国民) をもち、直接目的語として男性複数対格の νόμους (法) をとっており、いずれも「国民が法を作る」という内容を表す点で共通する。しかし、意味上中間態が受動態よりも能動態に近いとはいえ、「動作主体と特別な関係を結んでなされることを示す」という一点で、能動態と中間態には重要な意味上の差異が生じてくる。c) の中間態では法を作るという行為を「自分自身のために」おこなうのだという意味合いが濃厚である。行為に対する動作主の利害関係が c) の中間態で示されているのであり、それに対して a) の能動態はそうした利害関係を特に明示しないニュートラルな表現だといえる。c) を意識するならば、「国民はみずからの利益のために法を作る」ということになるだろう。

II-2 中間態の用法

中間態の主要な用法は便宜上以下のように大別できる。

(i) 直接再帰的 (direct reflexive middle), すなわち動作主が自分の身に行為を及ぼしている場合。ここでは「自身」あるいは「自分の身体」が行為の直接目的語として含意される。身支度、化粧などを表す動詞によく見られる。e.g. λούομαι 「自分を洗う(入浴する)」[cf. λούω 「(自分と関わらぬ何かを) 洗う」]; ἀλείφομαι 「自分の体に油を塗る」; κοσμοῦμαι 「自分の身を飾る」; στεφανοῦμαι 「自分に冠をかぶせる」; γυμνάζομαι 「自分の体を働かせる(運動する)」。

(ii) 間接再帰的 (indirect reflexive middle), すなわち動作主が「自分自身のために」とか「自身に関わる事柄として」行為をおこなう場合。ここではしばしば「自身」が行為の間接目的語として含意される。e.g. πορίζομαι 「(自分のために) 備える」[cf. πορίζω 「(自分の利害に関わらず何かを) 備える」]; φυλάττομαι 「自分の身を守る」[cf. φυλάττω 「人の見張りを努める」]; αἰροῦμαι 「(自分のために) 選ぶ」; παρέχομαι 「(自分のために) 供給する」[cf. παρέχω 「(人に) 供給する」]; 上の例文 (3) c) の τίθεται はこの用法の内に入るものと見ることができる。

(iii) 使役的 (causative middle), すなわち「自分のために人に～させる」の意味を表す場合。e.g. διδάσκομαι τὸν υἱόν 「私は息子を(人に) 教えさせる(自ら教えるのではないが自身の利益のために先生につける)」[cf. διδάσκω τὸν υἱόν 「(他人の) 息子に教える」]; παρατίθεμαι αὐτον 「私は(部下などに命じて) 食糧を貯えさせる」。

(iv) 相互的 (reciprocal middle), すなわち「互いに～をする」の意味を表す場合。双数もしくは複数の主語をもって相互関係を示す用法。したがって「争い」、「応答」、「挨拶」、「抱擁」

などを意味する動詞に見られる。διά (互いに) との複合形が多い。e.g. ἀλλήλους ἐμάχοντο 「彼らは互いに戦っていた」; διελέγοντο 「彼らは互いに語り合っていた」; διανεμόμεθα 「私たちは互いに分かち合う」。

II-3 Deponentia (能動態欠如動詞)

ところでギリシア語動詞のなかには能動態をもたず、中間態によって能動の意味を補う語がある。これをラテン語で deponentia [verba] (単数 deponens [verbum]; Eng. deponent verbs) という (deponentia は動詞 depono 「下に置く, 捨てる」の現在分詞中性複数主格。「[本来動詞がもつべき能動態の形態を] 放棄しているもの」という意味で文法家がつけた名である。日本では定まった訳語がないが、一応能動態欠如動詞としておく)。その内の一部はアオリストにおいてのみ中間態の代わりに受動態をもつ「受動態型能動態欠如動詞」(passive deponent) であるが (e.g. ἐνθυμέομαι 「内省する」, aor. ἐνεθυμέθην), それ以外は、現在, 未来, アオリスト, 現在完了の直説法中間態を主要部分にもつ「中間態型能動態欠如動詞」(middle deponent) である。これらは身体の所作と精神活動 (感情や思考) を表す動詞が多い。先に見たように、能動態と中間態を比較すると前者は客観的な動作の提示で、後者は動作に対する主語の主體的な関与の状態 (主語の意志, 利害, 感情価値等) の表明であるのだから、以下のような動詞が能動態を「放棄」せざるをえなかったというのは理解できることである。

ἄλλομαι 「跳ぶ」; πέτομαι 「飛ぶ」; ὀρχέομαι 「踊る」; οἴχομαι 「立ち去る」; δέркоμαι 「見る」; ἀκροάομαι 「聞く」; κέωμαι 「横たわる」; βούλομαι 「欲する」; ἠδομαι 「喜ぶ」; αἰσθάνομαι 「知覚する」; οἶομαι 「考える」; ὀδύρομαι 「嘆く」; μέμφομαι 「非難する」; μαίνομαι 「狂う」; ἔραμαι 「愛する」, etc.

II-4 中間態の「派生物」としての受動態

ここで注意しておきたいのは、ギリシア語が属する印欧語族において、中間態が起源的に受動態に先立つというのが定説となっていることである。近代諸語では中間態が衰退し、能動態を使う再帰的構文などにほとんど取って代わられたため (例えばフランス語の代名動詞を見よ), 近代語に慣れ親しんでいるわれわれの多くにとってこれは意外に思われることだろう。大体、「中間態」(μεσότης) という用語そのものを見ても、その命名者である古代のギリシア語文法家 (例えば紀元前二世紀のディオニューシオス・トラクス Dionysios Thrax) 自身がすでに能動態と受動態の二つの態を両極に置いて、その両者の「中間」に位置する第三の態として思い描いていたものと想像できる。しかし、近代の比較言語学研究成果はその見方を逆転させた。始めに能動態と中間態があったのであり、受動態は中間態の一用法として出てきたものにすぎなかった、というのである。「受動態は能動と中間態が客観的と主観的な動詞の意味の表示であるに対して、言わば一種の言語的な贅沢品であって、受身で表すものはすべて能動で表し得るものである」(高津春繁)⁽¹²⁾。印欧祖語では、形態上ははっきり区別される受動態形は存在しなかったと推測される⁽¹³⁾。「第三の態」に位置づけられるべきなのは、むしろ受動態の方なのだった。

繰り返しになるが、中間態は動詞の働き方が主体に向かっている様を示す、いわば「求心的」な動詞作用の様態である。例えば「人を殺す」というのは能動態で、「人に殺される」は受動態、そして「自殺する」は中間態に属する表現法だと一応区別できる。しかし「人に殺される」のも「自殺する」のも、主語（明示された主語であれ、動詞に含意された主語であれ）が「殺す」という作用を受ける点で同一である⁽¹⁴⁾。その作用を起こす動作主もしくは作用因 agent（ここでは殺害者）が自分自身か他人かの相違があるのみである。しかも印欧語では受動態の構文において動作主の提示は不可欠の要請事項ではない。ギリシア語の古層にあるホメロスでは全体として受動文が非常に少なく、あっても後年のように動作主を *ὑπό* その他の前置詞＋属格の組み合わせで明示した例がほとんど見当たらないという事実はこの点で示唆的である（ある調査によれば、『イーリアス』の最初の6章[約5,000行]にそのような「完全受動文」は5例しか見られぬとのこと⁽¹⁵⁾）。もっと手近な例で言えば、英語の受動文で動作の行為者が一般不定のものであったり、または重要視されない場合に、by＋対格の副詞句を省略しうる（あるいは省略した方がよい）という文法規則を思い起こしてみればよい（e.g. We speak Japanese here. → Japanese is spoken here.）。むしろ by～がついていない方が普通なのであって、実際、クワーク Quirk らによれば、英語受動文の内の八割方が動作手を明示しない文（agentless passive）だという⁽¹⁶⁾。動作主を示さぬ受動文は、受動文の原型としての中間態的な文を暗示しているように思われる。

ともあれ、ギリシア語においては上記の原型的な中間態の一部としての「受動的」用法が発展して、未来とアオリストの二つの時称のみにおいて、中間態とは別個の受動態の形をもつようになった⁽¹⁷⁾。しかしそれ以外の時称では受動態は依然として中間態の形を借用し続け、古典時代に至っても必ずしも両者が截然と区別できるようになったわけではない。多くの場合、文脈から見当がつかだけである。

それでは、同じ印欧語族に属するラテン語の場合はどうか。次にそれを見よう。

Ⅲ ラテン語の中間態的用法

Ⅲ-1 ラテン語の *deponentia*

ラテン語ではギリシア語に見られるような中間態の幅広い使用がなく、その「派生物」としての受動態が能動態と共に動詞全般にわたる形態論上と統語論上の両面での基本体系となった。ギリシア語の未来形とアオリスト形のように受動態と区別できる中間態の変化形も存在しない。しかしそれにも関わらずラテン語のなかにその名残が確かにある。まず *deponentia* がそれである。

deponentia はラテン語の初級文法書では通常「受動態の変化形式しか持たずに、しかも意味は能動である動詞」と定義される⁽¹⁸⁾。これは通常の動詞と同様に、不定法の形に従って四種の変化に分類されるが、大半が第一変化に所属する（この第一変化に属する *deponentia* はすべて弱変化）。ラテン語動詞全体から見れば *deponentia* に属する動詞の数は比較的少数であるが、しかしラテン文における *deponentia* の使用頻度はかなり高いといえる。以下にその内の代表的な語を列挙する。

(1) 第一変化 (不定法語尾 -ari)

arbitror「判断する」; conor「試みる」; conspicio「認める」; contemplan「観察する」; for「話す」; meditor「思う」; miror「驚嘆する」; moror「ためらう」; opinor「考える」; osculor「接吻する」; tutor「守る」; ueneror「敬う」.

(2) 第二変化 (不定法語尾 -eri)

fateor「告白する」; misereor「憐れむ」; polliceor「約束する」; reor「思う」; tueor「保護する」; uereor「畏怖する」.

(3) 第三変化 (不定法語尾 -i)

apiscor「得る」; amplector「抱擁する」; fruor「享受する」; fungor「実行する」; gradior「歩む」; labor「滑る」; loquor「話す」; morior「死ぬ」; nascor「生まれる」; obliuiscor「忘れる」; patior「蒙る」; reminiscor「思い出す」; sequor「従う」; utor「用いる」; uescor「食べる」.

(4) 第四変化 (不定法語尾 -iri)

mentior「嘘をつく」; metior「測る」; ordior「始める」; orior「昇る」; potior「所有する」; sortior「くじを引く」.

他に、ごく少数だが、現在系 (現在, 未完了過去, 未来) では通常の動詞と同様に能動形を使うが、完了系時称では受動形を用いる動詞がある。これを *semideponentia* と呼ぶ。e.g. *audeo*「敢えて行う」(完了 *ausus sum*); *gaudeo*「喜ぶ」(完了 *gausus sum*); *fido*「信頼する」(完了 *fisus sum*); *soleo*「習慣とする」(完了 *solitus sum*). 逆に *deponentia* の過去分詞の多くが受動的意味で理解されるようになる傾向が次第に強まり (e.g. *res confessa*「明らかにされた事柄」[キケロ『ウェレース弾劾』3. 130]; *adfectus ficti et imitati*「仮装され模倣された感情」[クインティリアヌス, 2. 3. 61]), *deponentia* は時代が下るにつれて衰退の一途を辿る。

さて、上で挙げた *deponentia* の語群を見ると、意味分布がギリシア語中間態のそれと重なっていることが確認できる。身体的であれ、心的であれ、自身の内部の動き (主体の感情表現および状態の変化) を示す動詞、すなわち「求心的」な様態を表す動詞が多く、程度の差はあれ、それらはいずれも「再帰的」意味を共有しているといえる。ギリシア語の中間態と同様、対格の直接目的語をとる他動詞である場合もあるが、多くは自動詞として用いられる。例えば *utor*, *fruor*, *fungor*, *potior*, *uescor* などは、少なくとも古典期において、目的語に相当する補語を奪格 (おそらく「手段の奪格 *instrumental ablative*」) でとるのが一般的であり⁽¹⁹⁾ (e.g. *utimur uerbis*「私たちは言葉を使う」, *frueris uita*「君は人生を享受している」), また *obliuiscor*, *misereor*, *reminiscor* のように属格をとる場合が多い動詞もある (e.g. *miserere mei, domine*「主よ, 我を憐れみたまえ」)。ともかく、以上の事から、ラテン語の初級文法書で *deponentia* を「受動態の変化形式しか持たずに、しかも意味は能動である動詞」と定義しているのが、初心者を混乱させないための便宜的な措置以上のものでないことがわかってくる。厳密には「意味は能動」でもない。もっと正確に定義しておく、ラテン語の *deponentia* は、「受動態のみの変化形式をもつが、受動の意味を欠き、能動の意味に近いがそれよりも『求心的』な中間態的 (もしくは再帰的) 意味をもつ動詞」だということになる。

Ⅲ-2 その他の中間態的用法

ラテン語にはまた、受動態と能動態の両方の変化形式をもちながら、受動態の形で受動的意味と中間態的（再帰的）意味の両方をもちうる動詞もある。例えば *congregantur* は受動的な「彼らは集められる」と中間態的な「彼らは集まる」の二つの意味が文脈次第で可能である。次の例文で a) は能動文、b) は受動文、そして c) は中間態的である。

(4) a) *dispersos homines in unum locum congregat.* 「彼は散らばっていた者たちを一か所に集める。」

b) *milites a duce congregantur.* 「兵士たちが将軍によって集められる。」

c) *pares cum paribus, veteri prouerbio, facillime congregantur.* 「古い諺によれば、等しき者たちは等しき者たちと最も容易に集まる [類は友を呼ぶ]。」（キケロ『老境について』3.7）

c) の中間態的な *congregantur* は能動態の *conueniunt* 「彼らは集まる」に置き換えても何ら意味の相違はないと思われるかもしれない。だが、これまで見てきたように、c) を普通の能動文にパラフレーズすると、両者には動作主体の動作への関わり方の度合いをめぐって、微妙な意味の相違が生じてくる。「形式が異なれば意味も異なる」というテーゼがここでも適用できるのであって、*pares cum paribus facillime congregantur.* と *pares cum paribus facillime conueniunt.* という二つの文は決して等価の文だとは言えない。

c) はキケロの散文からの用例であり、能動態と併用される中間態的用法はそう多くないにせよこれに限らず他の散文にもたまに見受けられる。ところが古典期の韻文において散文にあまり見られない中間態的用法の新たな使用が急増する（そしてその影響が後年の散文に及ぶことになる）。なかでも多いのがウェルギリウスである。『アエネーイス』*Aeneis*（以下 *Aen.* と略記）の第一巻でこの用法と思われるものに最初に出会うのは228行においてである。

*tristior et lacrimis oculos suffusa nitentis
adloquitur Venus. (Aen. 1.228-9.)*

一層悲しんで、輝く眼に涙をあふれさせて

ウェヌスは（彼に）話しかける。

辛酸をなめている息子アエネーアースを助けてもらうためにウェヌスがユピテルに嘆願を始めようとしている場面である。*suffusa* は *suffundo* 「(液体などが何かの) 下を流れる, 広がる」の完了分詞女性単数主格で、*tristior* と共に主語の *Venus* にかかるが、これは通常の受動態と読むよりも中間態分詞と理解する方が妥当と思われる。涙を流すという行為はウェヌスが自らの身体（の一部）に対して行ったものであり、他者の行為によって引き起こされたものではないから、受動態とはとりにくい。韻律と相 (*aspect*) の問題を無視するなら、*suffusa* を現在分詞に変えて *lacrimis oculos suffundens Venus* とすれば *suffundo* の標準的な語法になるのだろう（その場合、*oculos* は *suffundens* の直接目的語、*lacrimis* は「手段の奪格」と解

せる)。それをウェルギリウスはあえて中間態的に使っている。完了分詞以外の用例も出しておく。第二巻、トロヤの陥落の場での老王プリアムスの描写。

arma diu senior desueta trementibus aeuo
circumdat nequiquam umeris et inutile ferrum
cingitur... (Aen. 2.509-11)

老王は、長いこと使われていなかった甲冑を、年のため震えている肩に
無益にも纏い、役に立たぬ剣を身につける。

最後の *cingitur* が中間態的用法である。形は *cingo* 「帯で巻く、帯を締める」の直説法受動態三人称単数現在。ここで武装は人に手伝ってもらうわけではなく（ともかくこの非常時ではそのような状況にはない）、王が自分自身の体に対して行うのである。ついでながら、*inutile* は構文上 *ferrum* を修飾するが、この「剣」がなまくらだというわけではなく、プリアムス王は老齢ゆえに剣をふるう体力がないということだろう（つまりここでの形容詞 *inutile* の用法は属性的 *attributive* でなく述語的 *predicative* である）。その *ferrum* は、一応、中間的受動態 *cingitur* の直接目的語 (*external accusative object*) と解せるが、一方で、いわゆる「限定の対格」ともとれる。同様に、前の例文の *oculos* も、同じく直接目的語ととることができる一方で、「限定の対格」の一用法ととることも無理ではない。いずれにせよ、中間態的用法の動詞と結びついて現れるこうした対格名詞は、標準的なラテン語散文にはまれなギリシア風の用法と思われる場合が多い。そこで次にこの対格の問題についても簡単にふれておく必要がある。

IV 「ギリシア式対格」

IV-1 「脚の速いアキレウス」

ギリシア語の対格には「限定の対格」（もしくは「関係の対格」）と呼ばれる語法がよく見られる⁽²⁰⁾。これは状態などを表す動詞（とりわけ分詞）や形容詞に対格がついて、その動詞もしくは形容詞の意味内容が「いかなる点において」そうであるのかを示すものである。ラテン語ではこれは奪格 (*ablativus limitationis*) で表現するのが普通であったため、ラテン文法の立場からこれを「ギリシア式対格」(Lat. *accusativus Graecus*; Eng. *Greek accusative*) と称する。『イーリアス』からひとつ例を引こう。

τοῖσι δ' ἀνιστάμενος μετέφη πόδας ὠκὺς Ἀχιλεὺς

脚の速いアキレウスは、皆の間に立ち上がってこう語った。(『イーリアス』1.58)

後半の三語 *πόδας ὠκὺς Ἀχιλεὺς* 「脚の速いアキレウス」は、ホメーロスのよく知られた定形句 *formulae* のひとつであるが、ここの *πόδας* は男性名詞 *ὁ πούς* (単数属格 *τοῦ ποδός*) の複数対格であって、「限定の対格」の典型的な例である。直訳すると、「両足に関して速いアキレウス」ということになる。ここでは対格は形容詞が適用される身体の部分を限定するために使われている。次もほぼ同じ用法。

τωφλὸς τὰ τῶτα τὸν τε νοῦν τὰ τ' ὄμματ' εἶ
 お前は盲目だ、耳も心も目も。(『オイディプス王』371)

τὰ ὄματα は中性名詞 τὸ ὄσ「耳」の複数対格, τὸν νοῦν は男性名詞 ὁ νοῦς「心, 理性」の単数対格, そして τὰ ὄμματ' (= ὄμματα) は中性名詞 τὸ ὄμμα「目」の複数対格であって, すべて τωφλὸς「盲目の」という形容詞の意味内容が「いかなる点に」及んでいるかを示している。オイディプスは予言者ティレシアスに向かって, お前が見えないのは目だけでなく, 耳だって心だって見えていない, と断じている。しかしこの劇の観客は, まさに「劇的アイロニー」によって, それがむしろオイディプス自身のことであるのを知っている。

「限定の対格」は, 上のように (i) 身体の部分限定するだけでなく, (ii) 「特性もしくは属性(性質, 形状, 名前, 生まれ, 数など)」を限定する場合もあるし, また (iii) 「領域全般」を示す場合もある。次は (ii) の「特性や属性」を示す対格の例。

ποταμός, Κύδνος ὄνομα, εὐρος δύο πλέθρων

キュドノスという名前で, 幅が2プレトロンある川。(クセノポーン『アナバシス』1.2.23.) ὄνομα(名前)と εὐρος(幅)がいずれも中性単数の「限定の対格」であり, 前者は「名前に関して」, 後者は「幅に関して」という風に意味を限定している。ちなみに δύο πλέθρων は尺度を表す属格。

IV-2 ラテン詩における「ギリシア式対格」

ギリシア語で広く用いられた「限定(関係)の対格」は, ラテン語でも古くからあることはあったが, 古典期のラテン語散文では例外的にしか見られない。キケロではせいぜい uicem, partem, quid の使用がそれに入ると見なされるくらいである⁽²¹⁾。その理由は前述のように動詞や形容詞の意味内容が「いかなる点において」であるかを限定するのはラテン語では奪格で表現するのが普通だからである (e.g. numero ad duodecim 「数においておよそ20」カエサル『ガリア戦記』1.5.2)。ところがこれをウェルギリウスを代表とする古典期のラテン詩人たちがギリシア文学の影響を受けて自作品に意識的に用いるようになる(そしてこれをさらに後年の散文作家たちがしばしば模倣することになる)。ウッドコックに従って, 「限定の対格」の詩的用法を以下の三つに分類しておく⁽²²⁾。以下で「受動態」とあるのは本来の受動態と中間態の意味をもつ受動態の両方を含みうる。

(i) 形容詞と共に用い, その形容詞がいかなる観点で適用されるかを示すもの。

e.g. flaua comas 「髪に関して黄金色の女性(金髪娘)」(オウィディウス『変身物語』9.307.) : おそらくこれはホメーロスの κάρη ξανθὸς Μενέλαος 「金髪のメネラーオス」(『オデュッセイア』15.133.) の模倣だろう。

nuda genu 「膝に関して裸の彼女(膝を剥き出しにした彼女)」(Aen. 1.320.);

nigrantes terga iuuenos 「背中に関して黒い雄牛(背中が黒い雄牛)」(Aen. 5.97.);

Cressa genus 「生まれに関してクレータの女(クレータ出身の女)」(Aen. 5.285.).

qui genus? 「(汝らは)生まれに関して何者であるのか(どこの出身か)」(Aen. 8.114.) [=

τίνας τὸ γένος;]

(ii) 受動態分詞と（また時には定動詞と）共に用い、作用を受ける身体の部分を示すもの。
e.g. picti squalentia terga lacerti 「鱗のある背中を彩色してあるトカゲ（鱗のある背中が色鮮やかなトカゲ）」 (*Georgics*, 4, 13.);

ancipiti mentem formidine pressus 「恐ろしい危険によって心を圧迫されて」 (*Aen.* 3.47.);
hoc concussa metu mentem 「この恐怖のために心をかき乱されて」 (*Aen.* 12.468.).

lacrimis perfusa genas 「頬を涙で満たされて（頬に涙を一杯流して）」 (*Aen.* 12.64.);

(iii) 特に装いや身支度に関係する動詞 (e.g. induor 「着る」; succingor 「身に帯びる」) の受動態分詞（また時には受動態の定動詞形）と共に用い、その動詞が表す動作が何でもって果たされるかを示すもの。

e.g. laeuo suspensi loculos tabulamque lacerto . 「彼らは左腕に小箱と板をぶら下げている」
ホラーティウス『風刺詩』1. 6. 74);

perque pedes traiectus lora tumentis 「そして（ヘクトルは）膨れた脚に革紐を通されたままで」 (*Aen.* 2.273)

clipeumque auroque tilicem Loricam induitur 「(ある者は) 丸盾と黄金の三重の甲冑を身につける」 (*Aen.* 7.640.): この auro (中性名詞 aurum 「黄金」の単数奪格) はおそらく「性質の奪格」。

V デーロスの女神のブーツ

さて、大分遠回りをしてきたが、以上がウエルギリウス『牧歌』第七歌32行の suras euincta の語法を理解するための必要最小限の常識である。これが含まれるコリュドーンの四行連 (quatrain) の本文と試訳はすでに I で出しているが、念のため本文のみを以下にもう一度掲げておく。

Saetosi caput hoc apri tibi, Delia, paruus
et ramosa Micon uiuacis cornua cerui.
si proprium hoc fuerit, leui de marmore tota
puniceo stabis suras euincta coturno. (*Bucol.* 7.29-32.)

この四行全体に少し注釈を加えておく。前半二行と後半二行でそれぞれひとつのセンテンスを作っているが、例によって韻律上の要請が優先されているために語順が入り組んでいるので、構文が見やすいように散文的に並べかえてみる。

Delia, paruus Micon tibi hoc caput saetosi apri et ramosa cornua uiuacis cerui.
Si hoc fuerit proprium, stabis tota de leui marmore, euincta suras coturno purpureo.

まず29行の Delia は女性単数呼格。「デーロスの乙女よ」。狩猟を事とし、処女として身を持った女神アルテミスを指す。デーロスはエーゲ海に浮かぶ小島で、アポロドーロスによれば、

ゼウスと交わったレートーがその地でアルテミスを生んだと伝えられる (1.4.1)。主語の Micon は歌い手コリュドーン自身を指すという解釈とコリュドーンの息子もしくは年少の知人を指すという解釈がある。これは Micon につく形容詞 *paruus* 「小さい, 若い」の取り方と多少関わる (つまりへりくだりか, 文字どおりに小さいのか, ということである)。Micon という名前自体, ギリシア語のドーリス方言の *μικρός* (小さい) に由来する。実際, これもテオクリトスの『牧歌』に現れている名前である (5.112)。さて, 前半のセンテンスには主動詞が欠けているが, 女神アルテミスへの牧人もしくは狩人の言葉であり, 与格の *tibi* 「貴方に」や捧げ物を示す直接目的語があることから, *dat* (あるいは *dabit*) とか *dedicat* (あるいは *dedicabit*) といった語を強いて入れずとも祈願文であるのは明らかである。祈願文, 特に奉納の銘文で主動詞の省略はしばしば見られる (cf. *Aen.*1.337)。属格 *saetosi apri* (*saetosus aper* 「剛毛のある猪」) がかかる中性単数対格 *hoc caput* 「この頭」と, 同じく属格の *uiuacis cerui* (*uiuax cerus* 「長命の雄鹿」) がかかる 中性複数対格 *ramosa cornua* 「枝状の角」とがその捧げ物というわけである。男鹿は長命であると信じられていた。

後半のセンテンスは条件文。後文 (*apodosis*) の動詞 *stabis* 「貴方は立つでしょう」が直説法未来形であり, 前文 (*protasis*) の *fuerit* が (接続法完了ではなく) 未来完了形であろうから, 典型的な「予想的条件文」(*more vivid future*) として理解できる。それにしても前文の *si proprium hoc fuerit* は意味がとりにくい。*hoc* 「これ」が何を指すかということについて, 注釈者の間で解釈が大体三つに別れる。

(i) 29—30行で示された猪の頭と鹿の角の捧げ物。

(ii) 後文で示される彫像。

(iii) 29—30行に暗示されているコリュドーンの狩りの成功。

(i) か (ii) ならば形容詞 *proprium* (「自身の」, 「固有の」, 「ふさわしい」, 「永続的な」といった意味の広がりをもつ) は女神自身に関するものになり, (iii) ならばコリュドーン自身に関するものになる。

(i) 「この捧げ物を貴方にお供えしましたら」。

(ii) 「これ (次に述べる彫像) が貴方にふさわしいものでありますなら」。

(iii) 「私の狩りが常にうまくいくようになりましたら」。

いずれの解釈も無理ではない。

その後文。 *stabis tota de leui marmore* 「滑らかな大理石で, 貴方の全身が立つでしょう」。形容詞 *tota* 「全体の」は女性単数主格で *stabis* に含意された主語アルテミスにかかる。コリュドーンが将来捧げると約束しているアルテミス像は胸像ではなく全身像, しかも一部 (手足) だけ大理石を使って他は木材のようなもっと安い材料を使った像というのでなく, 全部大理石製の全身像にするのだと言っている。

そして問題箇所。 *puniceo coturno* は *puniceus coturnus* 「紫のブーツ」の男性単数奪格 (手段の奪格)。「紫のブーツでもって」。*coturnus* (*cothurnus* と綴る) はギリシア語 *κόθουρος* に由来。底が厚く, 膝の辺りまで届き, 前がレースで結ばれている「編み上げブーツ (長靴)」。悲劇役者が舞台上で履いたことから「悲劇」を表す比喩としても使われ, 実際『牧歌』第八歌10行ではその意味で出てくるが (*Sophocleo ... coturno*), ここでは文字通りの意味。これ

は弓矢と共にアルテミスの「持ち物」attribute となっているもので、これを履いて狩猟の女神は山野を自在に馳せ巡った（図版参照）。

euincta は、最初に述べたように euincio「しばる」、「巻き付ける」の完了分詞女性単数主格で、tota と共に stabis に含意された主語アルテミスにかかる。suras は女性名詞 sura「ふくらはぎ」の複数対格。さて、euincta は受身だろうか、それとも中間態的用法だろうか。注釈者の一人グールドは「この分詞は純粹に受動であり、suras は関係 [限定] の対格である」⁽²³⁾と断言している。この解釈が可能だとすれば、それはこの箇所がアルテミスの大理石像の描写であるから、euincta の動作主が女神自身でなく、彫像の制作者、もしくは依頼者（コリュドーン）だと理解する限りにおいてである。確かにウェルギリウスにはこれと類似した表現で uincio「しばる、巻き付ける」を能動態で使用した例も見られる。

uirginibus Tyriis mos est gestare pharetram

purpureoque alte suras uincire coturno.
(Aen. 1.336-7)

テュルス（カルタゴ）の処女たちにとって、矢筒を携え、紫のブーツでふくらはぎを高くまで縛ることが習わしです。

ここでは能動態不定法の uincire が suras を「直接目的語」として支配する構文になっている⁽²⁴⁾。

しかしながら、今述べたように、ブーツはまさしくアルテミスの attribute なのであって、彫像で表現されようがされまいが、この「矢射る女神、矢をそそぎかける畏き処女神」は常にブーツを履いた姿でいる。そう考えるなら、『牧歌』第七歌32行で表現された「靴（の紐）でふくらはぎを縛る（靴を履く）」という行為は女神自身が自分の身体（の一部）に対しておこなった再帰的な行為であり、euincta は中間態的だということになる。別の注釈者コウルマンは「受動態+限定の対格」の可能性を認めつつも、「おそらく、indutus（着た）、accinctus（身に備えた）などのように、直接目的語の対格をもつ中間態だろう」⁽²⁵⁾と見る。私自身も、アルテミスの「常態」の描写であるという理由で、これは動作主が自分の身に行為を及ぼした中間態的用法と読むのが妥当だと考える。もっとも、コウルマンのように中間態的だからといって対



アルテミス（ディアーナ）像（Greenough and Kittredge [1976] より）

格を「直接目的語」として規定する必要はないのかもしれない。受動なら「限定の対格」だから、中間態なら「直接目的語」、という規則は別れない。それほどはっきりとした線を引くことはできないし、そもそも「限定の対格」と「直接目的語」という二つの概念が同一の文法範疇におけるシンメトリカルな対立項として語れるかどうか、実はいささか疑問である。見方によっては、中間態的完了分詞と結び付いた「限定の対格」的な「直接目的語」だといってもよいのかもしれない。さらに言うなら、この完了分詞 *euincta* は、靴を履くという行為のなされた時点よりも、その「行為」の結果として得られた「状態」としての女神の装いを示す方に力点が置かれている。すなわちこれは「動的」dynamic な意味よりは「状态的」stative な意味を表現することの方が眼目なのであって、その点でこの分詞は形容詞の値に近い。そう見るなら *suras* はギリシア語構文的な「限定の対格」と理解して差し支えない(26)。

ところで、形容詞 *punicus*「紫の」もギリシア語の *φοινίκιος* に由来する語 (cf. *φοῖνιξ*; Lat. *Punicus*「カルタゴ人」)。「紫」と訳したが、実はわれわれの紫より鮮明な、深紅に近い色を思い描いた方がよい。*OLD* では“Of a brilliant red colour, scarlet, crimson, etc.”と定義されている。この色が「高貴さ」の象徴であることはよく知られている。色彩を示すこの付加形容詞は、コリュドーンが女神に捧げると約束する大理石像が真っ白ではなく彩色をほどこしたものであることを示唆している。

VI むすびに——『牧歌』の中間態的語法

以上、かなり大まかなラフ・スケッチではあるが、『牧歌』第七歌32行の *euincta* が中間態的語法と考えられる理由を述べた。ウェルギリウスが『牧歌』の他の箇所のみならず、後に続く『農耕詩』でも、そして大作『アエネーイス』でも、引き続きこうしたギリシア語的な動詞の用法を折にふれて使用していることは、これまでいくつか引いた用例からも確認できる。もとより本稿ではウェルギリウスの作品全般におけるすべての使用例の分析、分類、比較を行う意図はなく、またその余裕もない。山羊飼いのコリュドーンが羊飼いテュルスと競い合っ歌う歌のひとくぐりに注目し、それがまさに「アルカディア人」にふさわしい声音を備えているのだということが確認できれば、それでひとまず本稿の目的は達したことになる。とはいえ、この箇所に限らず、ウェルギリウスに見られる同種の中間態的完了分詞の用法は私には依然として興味深く思われ、さらに深く掘り下げて考察することを今後の課題としたい。その準備の意味も含めて、最後に、私が『牧歌』全十歌を読んで、ギリシア語中間態を応用した完了分詞の詩的語法と確認したもの、あるいはその可能性があると思えたものを以下にリスト・アップしておく。該当箇所を引き、それに試訳と簡単なコメントを附す。いずれの場合も、「ギリシア風」に名詞（もしくは形容詞＋名詞）の対格形と結び付けて使われている。

- (1) *hinc tibi, quae semper, uicino ab limite saepes*
Hyblaeis apibus florem depasta salicti
saepe leui somnum suadebit inire susurro; (1.53-5.)

こなたでは、いつものように、隣りとの境で生け垣が

——それは柳の花をヒュブラの蜜蜂に食わせているのだが——
しばしば軽やかな囁きによって君を眠りへと誘うだろう。

メリポエウスの台詞の一節。かなり難解な文だが、*hinc, quae semper, saepes ab uicino limite, depasta florem salicti apibus Hyblaeis, saepe tibi suadebit inire somnum leui susurro* と解する。53行の *florem depasta* が問題箇所。*depasta* は *depasco* の完了分詞で女性単数主格。主語の *saepes* (生け垣) に支配される。意味は受動と中間態の両方が可能。*depasco* を「～から取って食べる」ととるなら、能動文 *apēs saepem depascunt* (蜜蜂が生け垣から取って食べる) に対応する受動文 (生け垣が蜜蜂によって取って食べられる) ということになり、その場合 *florem* は典型的な「限定の対格」。生け垣が「食べる」という動作を受ける部分を特定している。これはIV-2で見た(ii)の用法に当たる。*depasco* を「食物として供給する」の意味にとるなら、能動文 *apibus saepes depascit florem* (生け垣が蜜蜂に花を食わせてやる) に対応する中間態の語法 (生け垣が「生け垣自体に関わる事として」蜜蜂に「生け垣に属する」花を食わせている) になる。

- (2) *Dic quibus in terris inscripti nomina regum
nascantur flores ...* (3.106-7.)

言ってみよ、いかなる土地で、王たちの名前を記した花が育つのかを。

メナルカスの謎かけ。謎かけが牧歌詩に現れる最初の箇所だとされる。すじ(葉脈?)の所が文字に見える花(水仙という説があり)に言及しているらしいが、正解は不明、歴代の注釈者を悩ませてきた。散文にすると、*Dic, in quibus terris nascantur flores inscripti nomina regum* となる。106行の *inscripti nomina* が問題箇所。*inscripti* は *inscribo* 「～に物を書く、銘を刻む」の完了分詞男性複数主格、*flores* に支配される。王の名を記入する動作主を花自身だと見るなら *inscripti* は中間態。花が単なる被動者 *patient* にすぎず、動作主でないと見るなら受動態。後者が自然なのかもしれぬが、いずれにせよ虚構の表現であることに変わりない。*nomina* は中性名詞 *nomen* 「名前」の複数対格で、IV-2で見た(iii)の用法に近い。自分で行ったにしろ、そうでないにしろ、花は記入の行為によって「王たちの名前」を身に帯びている。

- (3) *Chromis et Mnasyllus in antro
Silenum pueri somno uidere jacentem,
inflatum hesterno uenas, ut semper, Iaccho;* (6.13-5.)

若者たちのクロミスとムナシュルスは洞窟で、
シーレーヌスがいつも通りに、昨日のバックスのお神酒で
血管をふくらませて眠り込んでいるのを見た。

15行の *inflatum* は *inflo* 「吹き込む、ふくらませる」の完了分詞男性単数対格、上の *Silenum* にかかり、いぎたなく眠り込む酔っ払いの老人を描写する。ここも *inflo* の動作主をシーレーヌ自身と見るなら中間態、単なる被動者と見るなら受動態の意味になる。*uenas* は女性名詞 *uena* 「血管」の複数対格で、作用を被る身体の部分を示す。IV-2 の (ii) の用法に当たる。若者たちは乱暴にもこの老人を鎖につなぎ、無理やり歌を歌わせる。

- (4) *ille latus niueum molli fultus hyacintho*
ilice sub nigra pallentis ruminat herbas ...(6.53-4.)

彼（雄牛）は、白い腹を柔らかい水仙に押し付けて
 黒い櫛の下で青い草を反芻している。

そのシーレーヌスが歌う物語歌の一節。主語の *ille* はバシバエが求める雄牛。53行の *fultus* は *fulcio* 「支える」の完了分詞男性単数主格で *ille* に支配される。櫛の木陰の水仙の咲く草地に身を横たえている雄牛の描写で、動作主は牛自身以外に考えにくい。中間態的用法と見て間違いない。*latus* 「横腹」は中性単数対格。(3)と同様、作用を被る身体の部分を示すIV-2 の (ii) の用法。

- (5) *Linus ... pastor,*
floribus atque apio crinis ornatus amaro ...(6.67-8.)

花と苦いセロリで髪を飾った牧者リヌスは……

ornatus は *orno* 「飾る」の中間態的完了分詞男性単数主格。*Linus pastor* にかかる。*crinis* は男性名詞 *crinis* 「髪」の複数対格。「装い」の動作が身体のどの部分でなされたかを限定。IV-2 の (ii) の一例。

- (6) *...Scyllam Nisi, quam fama secuta est*
candida succinctam latrantibus inguina monstribus
dulichias uexasse rates ...(6.74-6.)

ニースの子スキュラを——彼女は、噂では、
 白い腰に咆哮する怪獣どもをくくりつけて、
 ドゥリキウム（イタカ）の船を揺すぶったそうだが……

上に出ただけではセンテンスが完結していないが、散文的に並べ変えると *Scyllam Nisi, quam fama secuta est succinctam candida inguina monstribus latrantibus, uexasse rates dulichias ...*となる。*quam* (先行詞 *Scyllam*) *rates uexasse* (「彼女が船を揺すぶったこと」)

が不定法句を形成している。75行の *succinctam* は *succingo* 「(あるもので) 帯として締める, 取り巻く」の完了分詞女性単数対格。対格主語に当たる関係代名詞 *quam* に支配される。怪物スキュラが自身の腰に, 帯か何かのように怪獣をくくりつけている。中間態的分詞。 *inguina* は中性名詞 *inguen* 「腰」の複数対格で, 「着用」の動作がなされる身体の部分を限定。これも IV-2 の (ii) の一例。「腰」と訳すのはいささか上品すぎるかもしれない。 *OLD* は *inguen* の二つ目の定義として *The part of the body around the sexual organs, groin.* と説明し, 用例としてこの箇所を引いている。

- (7) *si proprium hoc fuerit, leui de marmore tota
puniceo stabis suras euincta coturno.* (7.31-2.)

これが自分のものとなりましたら, 滑らかな大理石で
ふくらはぎを紫のブーツで包んだ貴方の全身像を作ってさしあげましょう。

この箇所については前項で詳述した。

- (8) *et mutata suos requierunt flumina cursus ...* (8.4.)

川も, 自らの流れを変えて, 立ち止まった。

これが含まれる第八歌冒頭のセンテンス全体 (1-5 行) を訳しておく, 「羊飼いダーモンとアルペイボエウスのムーサ (歌) を / — 競い合うこの二人に雌牛は驚嘆して牧草を忘れ, / 二人の歌に山猫も陶醉させられ, / 川も, 自らの流れを変えて, 立ち止まった — / そんなダーモンとアルペイボエウスのムーサ (歌) をわれらは語ろう。」となる。歌の見事さに動物も河川も魅了されるというオルペウスのモチーフの表現で, この川を擬人化した 4 行目の意味内容 (「川でさえ流れを止めて彼らの歌に聞き惚れる」) に大差はないが, *mutata* を受け身と見るか中間態的用法と見るかで構文のとりかたがいくらか異なってくる。*mutata* は *muto* 「動かす, 変える」の完了分詞中性複数主格。*flumina* 「川たち」に支配される。ダーモンとアルペイボエウス (の歌) を動作主と考えれば, *mutata* は受動分詞で, 「川は動かされて」となる。男性複数対格の *suos cursus* 「自らの流れ」は分詞にかかる「限定の対格」とも, *requierunt* (= *requieuerunt*; *requiesco* 「休む, 休ませる」の直説法三人称複数完了形) の直接目的語ともとれる。「川も, 自らの流れを変えられて, 立ち止まった」か, 「川も, (心) を動かされて, 自らの流れを止めた」か。デイ・ルイス Day Lewis は後者の解釈で, *And so entranced the rivers that they checked their onward flow.*⁽²⁷⁾ と訳している。

mutata の動作主を川自身と考えてこれを中間態分詞とするなら, *suos cursus* と *mutata* の結び付きが強まる。*requiesco* は対格の直接目的語をとらずに自動詞として使う方が普通なようである。そうすると, 「川も, 自らの流れを変えて, 立ち止まった」となる⁽²⁸⁾。

注

本稿で使用した文献のデータはすべて参考文献リストに示してある。注では著者名と刊行年度のみで示す。

ウェルギリウスの本文は以下の校訂本をから採った。

R. A. B. Mynors (ed.), *P. Vergili Maronis Opera*, Oxford, 1976. (初版1969年)

また、以下の略記号を用いた。

OLD=P. G. W. Glare (ed.), *Oxford Latin Dictionary*, Oxford, 1982.

TLL=*Thesaurus Linguae Latinae, München*, 1900-.

(1) トボスとしての 'locus amoenus' については、クルツィウス (1971), 第10章「理想的景観」('Die Ideallandschaft') を参照。ちなみにそこにはクルツィウスの次のような重要な指摘が含まれている。「『アエネーイス』だけを知っている者はウェルギリウスを知っていない。彼の『牧歌』が後生に及ぼした影響は叙事詩『アエネーイス』のそれに比して、ほとんど劣らぬほど重大である。ローマ帝政時代の1世紀からゲーテの時代にいたるまで、すべてのラテン的素養は『牧歌』の第一歌を読むことで始まった。このささやかな詩をそらんじていない者には、ヨーロッパの文学的伝統への一つの鍵が欠けている、といっても過言ではない」(275)。“Wer nur die *Aeneis* kennt, kennt Virgil nicht. Die Nachwirkung der Eklogen ist kaum weniger bedeutsam als die des Epos. Vom ersten Jahrhundert der Kaiserzeit bis zur Goethezeit hat alle lateinische Bildung mit der Lektüre der ersten Ekloge begonnen. Man sagt nicht zuviel, wenn man behauptet, daß demjenigen ein Schlüssel zur literarischen Tradition Europas fehlt, der dieses kleine Gedicht nicht im Kopf hat.” Curtius (1954), 197.

(2) “...he [Vergil] also added charms which the real Arcady had never possessed: luxuriant vegetation, eternal spring, and inexhaustible leisure for love.” Panofsky (1955), 299. パノフスキー (1969), 380. この訳文を使用。

(3) 「アルカディアは西暦紀元前四二年ないしは四一年に発見された。……この国『羊飼いたちの国、恋と詩の国』としてのアルカディア」の発見者はウェルギリウスである」。スネル (1974), 494。“Arkadien wurde entdeckt im Jahre 42 oder 41 v. Chr...Dessen Entdecker ist Vergil.” Snell (1955), 371.

(4) ウェルギリウスは紀元前40年代の終わり頃 (つまり詩人の20代後半) に『牧歌』に着手し、紀元前30年代の前半 (一説では37年) に発表したと推定されるが、制作年代、発表年代とも確定されているわけではない。Cf. Coleman (1977), 14-21.

(5) 「場所はミンキウス川のほとりということになっているが、これは、ウェルギリウスがマントヴァにいた時に書いたことを示すものではなく、現実のミンキウス川を意味しているのでもない。そのことは、ミンキウス川のほとりでアルカディア人が羊や山羊を飼い (3-4行)、マントヴァではあまり見られない海辺の植物の天人花 (6行) や、山の植物である柊 (1行) や松 (24行) や栗 (53行) などがミンキウス川の岸辺に生えていることから明らかである。ここにうたわれているのは……ウェルギリウスのアルカディアである。」河津 (1981), 133. (強調は原文)。これと逆の見解については以下を参照。Lee (1984), 20-22.

(6) Panofsky (1955), 299-300. パノフスキー (1969), 380.

(7) ウェルギリウスは『牧歌』、『農耕詩』、『アエネーイス』の全てで共通して (ホメーロスやテオクリトスが用いた) ギリシア詩に由来するヘクサメテル hexameter, すなわち dactylus (長音節と二つの短音節からなる脚 pes) もしくは spondeus (二つの長音節からなる pes) を六脚連ねて (ただし第5脚はほとんど dactylus であり、また最後の第六脚は spondeus か trochaeus [一つの長音節と一つの短音節からなる pes]) 一行とする詩型を用いた。多様な詩型を用いたカトゥルスやホラーティウスなどと比べると韻律分析 scansion が非常に簡単である。この4行目を分析するとこうなる。

āmbō | flōrēn- | tēs āe | tātibūs, || Ārcādēs | āmbō, |

したがって、Arcades は本来ならラテン語第三変格名詞の複数主格形だから長短長(ー ー ー)となるはずだが、韻律上の要請によって dactylus, すなわち長短短(ー ー ー)と数えなければならず、ギリシア語第三変格名詞 'Ἀρκας の複数主格形 Ἀρκάδες と同一になることがわかる。

(8) 例えば第八歌27行の grypes (第三変格男性名詞 grypes 「グリフィン」の複数主格) は同じように韻律上最後の音節 (ultima) を短く読まねばならず、ギリシア語名詞 γρύφες として意識されるようになっている。第七歌では21行の Libethrides (形容詞 libethris 「リーベートラ (の泉) の」の女性複数呼格) がもうひとつの例である。

さらにウェルギリウスにおけるギリシア詩的な韻律法のひとつとして特筆すべきなのは hiatus (母音連続) の使用である。ラテン詩では母音 (もしくは母音+m) の語尾をもつ語のあとに母音 (もしくは h+母音) で始まる語が続く場合、母音連続を避けるために前者の母音を省略するのが普通である。これを elision (母音省略) と呼ぶ。しかし詩人はしばしば母音省略をせずに hiatus をそのまま残すことがある。『牧歌』第七歌の53行 (コリュドーンの歌の一行) はその一例で、その第三脚と第五脚の二カ所で hiatus が出てくる。

Stānt ēt | iūnipē | rī · ēt | cāstānē- | āe · hīr- | sūtaē, (*Bucol.* 7.53.)

(ネズの木とイガに被われた栗の木がある。)

この「詩的許容 poetic licence」は一見すると韻律合わせのための便宜的な措置のように思えるが、少なくともウェルギリウスの場合にはそのような消極的な手だてではなく、詩的効果をあげるための積極的な技法だった。ヌーガレが指摘するように、これはホメーロスの詩に見られる hiatus の応用であり、「ウェルギリウスがこれを使うのはギリシア語の単語を含む詩行、もしくはギリシア風の韻律法をもつ詩行に限られる」。「...Virgile ne l'admet-il que dans des vers contenant soit des mots grecs, soit des hellénismes de versification.» [Nougaret (1976), 52.] ちなみにこの53行は第五脚が spondeus になっている例外的な詩行のひとつで、『牧歌』では他に第四歌49行と第五歌38行に見られるだけである。

(9) ウェルギリウスにおける「ギリシア語法」の問題を考えるにあたっては、アントワヌ・メイエの次の指摘を念頭に置いておきたい。「それでも、ウェルギリウスは彼の時代の、またとりわけ後代の他の詩人たちよりもより注意深くギリシア語形を使用した。ウェルギリウスの詩にはギリシア語のモデルが至るところに見られ、またしばしば露骨にそれが出ているにもかかわらず、全部合わせてみると彼の詩は極めてラテン的な様相を呈している。ウェルギリウスがギリシア詩をおのれの糧としたのは、自身の時代の文化にふさわしいローマの詩を作り上げるためだったのであり、たとえ借用が明白なくだりが含まれているとしても、それは彼がギリシア語法を自家薬籠中のものとしていなかったからいくつかの外見的な装飾を備える必要があったということではなく、彼の作品が、たとえローマのものであっても、同時にギリシア的なものでもあること、すなわち普遍的なものであるということを感じさせるためなのだ。」(Toutefois Virgile a usé des formes grecques avec plus de discrétion que d'autres poètes latins de son temps, et surtout du temps qui a suivi. L'ensemble des poèmes de Virgile offre, malgré les modèles grecs qui se reconnaissent partout et qui souvent sont mis en évidence, un aspect tout latin. C'est pour constituer une poésie romaine digne de la culture de son temps que Virgile s'est nourri de la poésie grecque, et, si ses emprunts sont manifestes en quelques passages, ce n'est pas qu'il ne se soit assez pénétré d'hellénisme pour avoir besoin de se parer de quelques ornements extérieurs, c'est pour faire sentir que son œuvre, si romaine qu'elle soit, est en même temps grecque, c'est-à-dire universelle.) Meillet (1938), 220.

(10) ギリシア語中間態の説明には主として以下の文献に依拠した。高津 (1960), Goodwin (1930),

Smyth (1984).

(11) *OED* の次の定義 (Voice, sb. I-5) を参照。"The form of a verb by which the relation of the subject to the action implied is indicated; one or other of the modes of inflection or varying a verb according to the distinctions of active, passive, or middle."

ただし、英語学の分野では voice を動詞の形態のみならず、文全体を表す概念として用いる場合もあり、何種類かの英語学辞典を見るとこの点に関して記述に統一がとれていないことに気づく。

「態は一般的に動作の方向性に関する言語的形態あるいは統語構造である。このような方向性を伴う動作を表現するのは、ふつう動詞であるから、態は主として主語と動詞の表す動作との関係を示す形態・構造である。1) John *kissed* Mary./ 2) Mary *was kissed* by John. において、二つの文の伝える客観的事実は同じであり、また動作の行為者も同じ John であるが、話者の観点が違う。すなわち、1) の文は動作主の観点から、2) の文は動作を受ける対象の観点から述べられている。1) の文を能動態 (ACTIVE VOICE)、2) の文を受動態 (PASSIVE VOICE) という」。大塚・中島 (1982)

「態 (voice) は、述べられる事実を変更することなく、文が表す動作を2つの異なる方向で見ることが可能にする文法範疇であって、具体的には、主語と述語動詞の関係を示すものであると言える」。松浪・池上・今井 (1983)

「文の主格 (NOMINATIVE) と他動詞 (TRANSITIVE VERB) の表す動作との関係を表す形態をいう。英語には、受動態 (PASSIVE VOICE) と能動態 (ACTIVE VOICE) との2つの種類がある。He *opened* the door. といえば能動態であり、The door *was opened*. といえば受動態である。能動態と受動態とは、同じ知的意味 (COGNITIVE MEANING) を持つ文となる」。荒木・安井 (1992)

「主語が動作の行為者であるか、あるいはその動作の受動体であるかを示す動詞の形態をいう。英語には、The snake *bit* someone. のような『行為者-行為-対象』構文における能動態 (Active voice) と、John *was bitten* by a snake. のような『対象-行為-行為者』構文における受動態 (Passive voice) の2種を認めるのが通例である」。石橋 *et al.* (1973)

古典語を扱う本稿で用いられる「態」は、*OED* およびこの最後の定義にはほぼ限定される。なお、voice の訳語には「態」の他に「相」というのも古くからあって、西洋古典語の文法書でこちらを使う研究者も多く、捨てがたい面もあるのだが、同じく「相」と訳される aspect との混同を避けるために本稿では「態」を使用する。

(12) 高津 (1960), 320—21. もっとも、これはいささか乱暴な発言であり、能動態と受動態が表面上「同一」の客観的事実を表現しうる (つまり同じ「知的意味」cognitive meaning を表現しうる) という意味では「受身で表すものはすべて能動で表し得る」というのは正しいが、厳密に言えば二つの態はいかなる「同一」の情報伝えようとしても、微妙な点で意味の差が生じてくるのであって、これは近代語の文と変わらないだろう。

(13) 「印欧祖語には形態上示差的な受動態というものはなかった。むしろ、近代ロマンス諸語の (もしくはスラヴ語やスカンディナヴィア語などの) 『再帰動詞』と似た機能を有するいわゆる『中間態』というものがあった。」[Proto-Indo-European did not have a morphologically distinct passive. Rather, there was a so-called middle voice whose functions were similar to those of the modern Romance (or Slavic, Scandinavian, etc.) 'reflexive' .] (Hock (1991), 347.) Cf. Palmer (1954), 262.

(14) この喩えは呉 (1952) から借用した (87頁)。

(15) 前島 (1989), 85. 実際、モンローの『ホメーロス語文法』では、中間態の用法の一部として「受身の意味」を説明しており、しかもそれはよく見られる用法ではないと断っている (Monro [1891], 8—9)。

(16) 「能動文の主語とは異なり、by-句で動作主を出すのは一般に選択的である。実際、英語の受動文のうちおよそ五分の四が動作主をはっきり示さない。」[Unlike the active subject, the agent *by*-phrase is generally optional. In fact approximately four out of five English passive sentences have no

expressed agent.] (Quirk *et al.* 1985, 165-6.)

(17) 「印欧語の受身の萌芽は分派以前にあったに違いないが、各個の語派に於ける独立の発達をしたもので、ギリシア語に於ても、古典時代は主として受身のみを表した *-θην* アオリスト、*-θήσομαι* 未来も、Homeros では *ἐφάνθην* 《現れた》が後代アッティカの *ἐφάνην* の代りに用いられているように、大部分の *-θην* は未だ中間態であり、*-ην* アオリストも *ἐπλήρην*, *ἐτύπην* 《打たれた》以外はすべて中間態である。*-θήσομαι* 未来はまったくない」。高津 (1960), 321. Cf. Monro (1891), 44-5.

(18) これが一般的な定義となっているように思われるが、統一がとれているわけではない。ラテン語の *deponentia* の訳語が確立しておらず、文法書によって大分異なるのはそのためかもしれない。例えば「能相欠如動詞」(田中 [1990]), 「受動相型動詞」(杏掛 [1989]), 「形式所相動詞」(泉井 [1952], 呉 [1952], 松平・国原 [1979]), 「異態動詞」(有田 [1984]) など(「能相」と「所相」はそれぞれ「能動態」と「受動態」の古い別称)。そもそも *deponere* 「放棄」されているのは何か。同じエルヌーが関わっている二つの本でも記述に矛盾が見られる。「中間態のもしくは能動の意味を有して受動態形しかもたぬ動詞がある。これが *déponents* である(能動、もしくは能動に近い意味をもちながら、能動態の形が放棄 *deponere* されているという理由でラテン語文法家がこう名付けた) ...un certain nombre de verbes, de sens moyen ou actif, n'ont que les désinences passives : ce sont les *déponents* (ainsi nommés par les gramairiens latins, parce qu'ils ont, tout en ayant un sens actif ou voisin de l'actif, abandonné (*deponere*) les désinences actives) ... (Ernout [1953], 115.) 「動詞の *déponents* の名は、その形態から受動の意味を『放棄 *deponere*』しているように見えることに由来する」Les verbes *déponents* sont ainsi appelés parce qu'ils paraissent «déposer» (lat. *deponere*) le sens passif de leurs désinences. (Ernout et Thomas [1953], 201.)

文法書によっては、後者の「受動の意味を放棄」したものであるという解釈を採って、能動態を欠いているわけではない動詞をも *deponentia* に含めているものがある。例えばドイツのある学校文法書では、「*deponens* とは、受動態の形でありながら能動の意味を有する動詞である」(Ein *Deponens* ist ein Verb, das passive Formen, jedoch aktive bedeutung hat.) と説明し、*lauor* 「入浴する」と *uehor* 「(馬などに) 乗って行く」の二例を挙げている (Studený [1977], 57)。いうまでもなく *lauor* にも *uehor* にも、それぞれ *lauo* 「洗う」、*ueho* 「運ぶ」という能動態が存在する。これはラテン語動詞の中間態的用法のほぼ全般に *deponentia* を適用した定義であり、これはこれで筋が通っている。しかし本稿では「能動態の形を放棄したもの」という狭義の意味に限定して論を進める。田中 (1990) の次の定義を参照。「能動相の形を持たず、形の上では受動形であるが意味は能動的または自動的な動詞がある。このような動詞を能相欠如動詞という。」(75頁)

(19) *utor*+対格はプラウトゥスによく見られ(ただしその本文の信憑性に疑問が持たれることがある [cf. *OLD*, *utor*]), *fruor*+対格はテレンティウスとカトーに散見される。*fungor*+対格は初期ラテン語では普通で、ネポース、タキトゥス、スエートーニウスにも残り、後期に至る。*potior* は属格と結びつく場合もあるが、対格との結合も初期および後期ラテン語でたまに見られる。*uescor* は初期および後期ラテン語、それに詩語で稀に対格と結び付けて使われることがある。(Gildersleeve and Lodge [1895], 262-3.)

(20) ギリシア語の「限定の対格」については次を参照した。高津 (1960), 258-9; Smyth (1984), 360-1; Goodwin (1930), 225-6. この三者はそれぞれ「限定対格」、*accusative of respect*, *accusative of specification* という語を用いている。

(21) Hale and Buck (1966), 205.

(22) Woodcock (1948), 13-4.

(23) "The participle is genuinely passive, and *suras* is accusative of respect, lit. "bound as to thy calves." Gould (1983), 63.

㉔) 文献で確認できる *euincio* の最初の用例は紀元前二世紀中頃の歴史家ヘミナ (L. Casius Hemina) の次の文。 *lapidem...quadratum...euinctum candelis quoquoersus* 「あらゆる方向に蠟でもって四角い石を結び付けて」(『歴史』37)。詩ではウエルギリウスで最初に見られ、その後オウィディウスやセネカなどに用いられる。 Cf. *TLL*, *evincio*; *OLD*, *euincio*。

本稿で扱っている箇所を含めると、ウエルギリウスの著作全体で *euincio* は六回、いずれも完了分詞の形で現れる。参考までに以下に他の五箇所の用例を列挙しておく。いずれも『アエネーイス』に出てくるものであり、同じように中間態的用法である可能性が高い。

(a) ...*puniceis ibant euincti tempora taenis* ... (5. 269.)

(全員が) 紫のリボンを額に巻いて行った。

(b) ...*adsit et euinctis attollat brachia palmis*. (5. 364.)

(勇気のある者は) 出てきて (皮を) 掌に巻いた両腕を挙げよ。

(c) ...*uiridi Mnestheus euinctus oliua*. (5. 494.)

緑のオリーブの (冠を) つけたムネステウス。

(d) *ipse caput tonsae foliis euinctus oliuae* ... (5. 774.)

(アエネーアースは) 自ら、切りそろえたオリーブの葉 (の冠) を頭につけて。

(e) ...*populeis adsunt euincti tempora ramis* ... (8. 286.)

(司祭たちは) ポプラの枝を頭に巻いて現れて…

このうち(c)以外のすべての完了分詞が対格名詞 [(a), (e)は *tempora*, (b)は *brachia*, (d)は *caput*] と結合している。

㉕) “*euincta* is probably middle like *indutus*, *accinctus* etc., with the acc. as direct object: ‘having bound her calves’...*Diana* is represented as having done for herself what the decorator does for her statue. Alternatively the participle could be passive with the acc. of reference: ‘being bound as to her calves’, i.e. ‘with her calves bound’.” Coleman (1971), 216.

㉖) その意味で、IV-2 で見た「限定の対格」の三つの分類において、(i)と(ii)の区別が難しい用例も出てくるわけである。

㉗) Lewis, C. D. (1983), 33.

㉘) 完了分詞ではないが、他にもこんな例が見られる。

Praeceptis aerii specula de montis in undas/deferar ... (8.59-60.)

(高い山の見晴らしのきく所から、私はまっさかさまに水に飛び込もう。)

ダーモーンの歌の一節。他の男のもとに去った恋人ニューサへの恨み節。失恋に耐え切れず、自分は死んでしまおうと言っている。*deferar* は *defero* 「下に運ぶ」の直説法一人称単数未来とも接続法一人称単数現在ともとれるが、おそらく前者。そして自分をふった女に原因があるとはいえ、身投げ行為の動作主は自分自身だから、この受動態形は中間態的な意味である。もっとも *defero* の中間態的用例はキケロ (『トウスクルム荘対談集』5. 69.) やカエサル (『ガリア戦記』7. 82. 1.) その他の散文にも散見されるので (cf. *OLD*, *defero*, 3b), 上の(1)から(8)までの詩的用法とは区別した方がよいだろう。

参考文献

- 荒木一雄・安井稔編 (1992) 『現代英文法辞典』三省堂。
- 有田潤 (1984) 『インデックス式ラテン文法表』白水社。
- Coleman, R. G. G. (1977), *Virgil : Eclogues*, Cambridge : Cambridge U. P.
- クルツィウス, E. R. (1971) 『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一・岸本通夫・中村善也訳, みすず書房。[Curtius, E. R. (1954), *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter* (2. Aufl.), Bern : Francke Verlag.]
- Edmonds, J. M. (1977), *The Greek Bucolic Poets* (revised), (text and translation), Cambridge, London : Heinemann (Loeb Classical Library), 1st ed. 1912.
- Ernout, A. (1953), *Morphologie Historique du Latin* (troisième édition, revue et corrigée), avec un Avant-Propos par A. Meillet, Paris : Éditions Klincksieck.
- Ernout, A. et Thomas, F. (1953), *Syntaxe Latine* (2e édition), Paris : Éditions Klincksieck.
- Fairclough, H. R. (1935), *Virgil with an English Translation, vol. I Eclogues etc.*, revised edition, London : Heinemann (Loeb Classical Library).
- Fasciamo, D. (1982), *Virgile Concordance*, Roma : Edizioni dell' Ateneo, s.p.a. (Les Presses de l' Université de Montréal).
- Flobert, P. (1975), *Les Verbes Déponents Latins : des Origines à Charlemagne*, Paris : Société d'Édition «Les Belles Lettres» .
- Frieze, H. S. (1883), *The Twelve Books of the Aeneid of Vergil* (text with notes and a Vergilian dictionary) (2nd ed.), New York : Appleton.
- Gildersleeve, B. L. and Lodge, G. (1895), *Latin Grammar* (3rd ed.), London : Macmillan.
- Glare P. G. W. (ed.)(1982), *Oxford Latin Dictionary*, Oxford: Clarendon Press.
- Goodwin, W. W. (1930), *A Greek Grammar* (2nd ed.), London : Macmillan. (originally published in 1879).
- Gould, H. E. (1983), *Virgil : Eclogues* (text, introduction, notes and vocabulary), Bristol : Bristol Classical Press.
- Greenough, J. B. and Kittredge, G. L. (1976), *The Greater Poems of Virgil, vol.2, Eclogues* (text, notes and vocabulary), New York : Caratzas Brothers.
- Hale, W. G. and Buck, C. D. (1966), *A Latin Grammar*, Alabama : University of Alabama Press (originally published in 1903).
- Hock, H. H. (1991), *Principles of Historical Linguistics* (2nd ed.), Berlin and New York : Mouton de Gruyter.
- 泉井久之助 (1952) 『ラテン広文典』白水社。
- 石橋幸太郎 *et al.* (1993) 『現代英語学辞典』成美堂。
- 河津千代 (1981) 『ウェルギリウス 牧歌・農耕詩』未来社。
- 高津春繁 (1960) 『ギリシア語文法』岩波書店。
- Kühner, R. und Stegamann, C. (1914), *Ausführliche Grammatik der Lateinischen Sprache, 2 Teil : Satzlehre* (2 Bände), Hannover : Hahnsche Buchhandlung.
- 呉茂一 (1952) 『ラテン語入門』岩波書店。
- 杵掛良彦 (1989) 『マクミラン新ラテン語コース』東京, マクミラン出版社。
- Lee, G. (1984), *Virgil : The Eclogues* (text, translation and notes), Harmondsworth : Penguin.
- Lewis, C. D. (1983), *Virgil : the Eclogues · the Georgics* (translation), with an introduction and notes by R. O. A. M. Lyne, Oxford: Oxford U. P. (The World's Classics).

- Lewis, C. T. and Short, C. (1879), *A Latin Dictionary*, Oxford : Clarendon Press.
- 前島儀一郎 (1989) 『英独仏語・古典語比較文法』 大学書林。
- 松浪有・池上嘉彦・今井邦彦 (1983) 『英語学事典』 大修館。
- 松平千秋・国原吉之助 (1979) 『新ラテン文法』 (第4改定版), 南江堂 (初版1968年)。
- Meglio, S. di (s.a.), *Virgilio : le Bucoliche (le Egloghe) (testo latino - costruzione versione italiana interlineare argomenti, note e verbi, scansione metrica e cesure)*, Roma : Edizioni Sormani.
- Meillet, A. (1938), *Esquisse d'une Histoire de la Langue Latine* (quatrième édition révisée et augmentée), Paris : Librairie Hachette.
- Monro, D. B. (1891), *A Grammar of the Homeric Dialect* (2nd ed.), Oxford : Clarendon Press.
- 水谷智洋 (1990) 『古典ギリシア語初歩』 岩波書店。
- Mynors, R. A. B. (1969), *P. Vergili Maronis Opera*, Oxford : Clarendon Press (Oxford Classical Texts).
- Nougaret, L. (1976), *Traité de Métrique Latine Classique* (Quatrième édition corrigée), Paris : Éditions Klincksieck.
- 大塚高信・中島文雄監修 (1982) 『新英語学辞典』 研究社。
- Palmer, L. R. (1954), *The Latin Language*, London : Faber and Faber, reprinted in 1988 by Bristol Classical Press.
- Panofsky, E. (1955), "Et in Arcadia ego" in *Meaning in the Visual Arts*, Doubleday. [パノフスキー E. (1969) 「われ、また、アルカディアにありき——プッサンと哀歌の伝統」 土岐恒二訳 (篠田一士編『現代人の思想 14 伝統と現代』, 所収)]
- Plessis, F. et Lejay, P. (1985), *Virgile : Œuvres (Texte Latin avec une introduction, biographique et littéraire, des notes critiques et explicatives, des gravures, des cartes et un index)*, Paris : Librairie Hachette.
- Quirk, R. et al. (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London & New York : Longman.
- Rieu, E. V. (1954), *Virgil : the pastoral poems* (text and translation), London : Penguin Books.
- Saint-Denis, E. de (1967), *Virgile : Bucoliques* (texte et traduction), Paris: Société d'Édition (Les Belles Lettres).
- Smyth, H. W. (1984), *Greek Grammar* (revised by G. M. Messing), Cambridge, Massachusetts : Harvard U. P. (originally published in 1920).
- スネル, B (1974) 『精神の発見』 新井靖一訳, 創文社。[Snell, B. (1955), *Die Entdeckung des Geistes* (3. Aufl.), Hamburg : Claassen Verlag.]
- Studeny, E. (1977), *Lateinische Schulgrammatik*, Frankfurt am Main · Berlin · München : Verlag Moritz Diesterweg.
- 田中秀央 (1966) 『羅和辞典』 研究社 (初版1952年)。
- 田中美知太郎・松平千秋 (1962) 『ギリシア語入門・改訂版』 岩波書店 (初版1951年)。
- 田中美知太郎・松平千秋 (1968) 『ギリシア語文法』 岩波書店。
- 田中利光 (1990) 『ラテン語初歩』 岩波書店。
- Thesaurus Linguae Latinae* (1900-), München.
- Woodcock, E. C. (1958), *A New Latin Syntax*, London : Methuen.
- 八木綾子 (1960) 「ウェルギリウス 田園詩」(*Bucol.* 1, 4, 7, 10 の散文訳) 『世界名詩集大成1 古代・中世』 平凡社, 所収。

付録 ウェルギリウス『牧歌』第七歌の本文および試訳

MELIBOEVUS CORYDON THYRSIS

- M. Forte sub arguta consederat ilice Daphnis,
 compulerantque greges Corydon et Thyrsis in unum,
 Thyrsis ouis, Corydon distentas lacte capellas,
 ambo florentes aetatibus, Arcades ambo,
 et cantare pares et respondere parati. (5)
- huc mihi, dum teneras defendo a frigore myrtos,
 uir gregis ipse caper deerrauerat; atque ego Daphnin
 aspicio. ille ubi me contra uidet, 'ocius' inquit
 'huc ades, o Meliboe; caper tibi saluus et haedi;
 et, si quid cessare potes, requiesce sub umbra. (10)
- huc ipsi potum uenient per prata iuuenti,
 hic uiridis tenera praetexit harundine ripas
 Mincius, eque sacra resonant examina quercu.'
 quid facerem? neque ego Alcippen nec Phyllida habebam
 depulsos a lacte domi quae clauderet agnos, (15)
- et certamen erat, Corydon cum Thyrside, magnum;
 posthabui tamen illorum mea seria ludo.
 alternis igitur contendere uersibus ambo
 coepere, alternos Musae meminisse uolebant.
 hos Corydon, illos referebat in ordine Thyrsis. (20)
- C. Nymphae noster amor Libethrides, aut mihi carmen,
 quale meo Codro, concedite (proxima Phoebi
 uersibus ille facit) aut, si non possumus omnes,
 hic arguta sacra pendebit fistula pinu.
- T. Pastores, hedera crescentem ornate poetam, (25)
 Arcades, inuidia rumpantur ut ilia Codro;
 aut, si ultra placitum laudarit, baccare frontem
 cingite, ne uati noceat mala lingua futuro.
- C. Saetosi caput hoc apri tibi, Delia, paruus
 et ramosa Micon uiuacis cornua cerui. (30)
 si proprium hoc fuerit, leui de marmore tota
 puniceo stabis suras euincta coturno.
- T. Sinum lactis et haec te liba, Priape, quotannis
 expectare sat est: custos es pauperis horti.
 nunc te marmoreum pro tempore fecimus; at tu, (35)
 si fetura gregem suppleuerit, aureus esto.

(メリボエウス) たまたま、さやさやと鳴る櫛の木の下にダプニスが座っていた、
そしてコリュドーンとテュルススが家畜の群れをひとつにまとめていた、
テュルススは羊を、コリュドーンは乳ではちきれんばかりの雌山羊を、
二人とも花盛りの年頃、二人ともアルカディア人だ、
歌の技量は同等、返歌の備えもできている。 (5)

ここに、私が柔らかい天人花を霜から守っている間に、私の
群れの中の夫である牡山羊が一頭、自ら迷い込んでしまった。それで私が
ダプニスを見つけたというわけだ。彼も私を見てこう言う。「急いで
こっちにおいでよ、メリボエウス。君の山羊は無事だよ。子山羊も大丈夫。
少し休めるのなら、木陰で休憩なさい。 (10)

ここに、子牛らは自分で水を飲みに牧草地を歩いてやって来るだろう。
ここでは、ミンキウス川が緑の岸辺を柔らかい葦で縁どり、
聖なる柏の木から蜂の群れが羽音を発している。」

さてどうするか。自分には家で乳離れした子羊たちを
囲いに入れてくれるアルキッペーもピュリスもいなかった。 (15)

それでいてコリュドーン対テュルススの大試合があった。
それでも私は自分の仕事より彼らの競技を優先させたのだ。
かくして両者は交互に歌で競い始めた。

詩女神は、私が互いに交わされる歌を覚えておくことを望まれた。
コリュドーンが歌えばテュルススが返す、という風に順番に彼らは歌った。 (20)

(コリュドーン) わが愛するリーベートルのニンフラよ、わがコドゥルスに
お認めになったような歌を私にお授け下さい (彼はアポロンに迫るほどの
詩を作ります)。さもなくば、誰にでもできることではないというのなら、
清らかな調べの笛を聖なる松の木に掛けてしましましょう。

(テュルスス) 牧人たちよ、アルカディア人らよ、現れつつある詩人を木蔭で飾れ、 (25)
妬みでコドゥルスのはらわたが裂けてしまうように。

あるいは、喜ばしい限度を越えて彼が誉めすぎることがあれば、
鹿の子草を額に巻け、悪口が未来の詩人を傷つけぬように。

(コリュドーン) デーロスの女神よ。若きミコンが、貴方にこの
剛毛のある猪の頭と、長命の雄鹿の枝状の角を捧げましょう。 (30)

これが自分のものとなったあかつきには、滑らかな大理石で
ふくらはぎを紫のブーツで包んだ貴方の全身像を作ってさしあげましょう。

(テュルスス) プリアーブスよ、せいぜい一腕の乳とこれらの菓子とが、毎年
ご期待に添えられるものです。あなたはつましき庭の番人なのですから。
今われらは間に合わせであなたを大理石像にしましたが、 (35)
繁殖して群れが増えたら、黄金製にいたしましよう。

- C. Nerine Calatea, thymo mihi dulcior Hyblae,
 candidior cynnis, hederā formosior alba,
 cum primum pasti repetent praesepia tauri,
 si qua tui Corydonis habet te cura, uenito. (40)
- T. Immo ego Sardoniis uidear tibi amarior herbis,
 horridior rusco, proiecta uilior alga,
 si mihi non haec lux toto iam longior anno est.
 ite domum pasti, si quis pudor, ite iuueni.
- C. Muscosi fontes et somno mollior herba, (45)
 et quae uos rara uiridis tegit arbutus umbra,
 solstitium pecori defendite : iam uenit aestas
 torrida, iam lento turgent in palmitē gemmae.
- T. Hic focus et taedae pingues, hic plurimus ignis
 semper, et adsidua postes fuligine nigri. (50)
 hic tantum Boreae curamus frigora quantum
 aut numerum lupus aut torrentia flumina ripas.
- C. Stant et iuniperi et castaneae hirsutae,
 strata iacent passim sua quaeque sub arbore poma,
 omnia nunc rident : at si formosus Alexis (55)
 montibus his abeat, uideas et flumina sicca.
- T. Aret ager, uitio moriens sitit aëris herba,
 Liber pampineas inuidit collibus umbras :
 Phyllidis aduentu nostrae nemus omne uirebit,
 Iuppiter et laeto descendet plurimus imbri. (60)
- C. Populus Alcidae gratissima, uitis Iaccho,
 formosae myrtus Veneri, sua laurea Phoebō ;
 Phyllis amat corylos : illas dum Phyllis amabit,
 nec myrtus uincet corylos, nec laurea Phoebi.
- T. Fraximus in siluis pulcherrima, pinus in hortis, (65)
 populus in fluuiis, abies in montibus altis :
 saepius at si me, Lycida formose, reuisas,
 fraxinus in siluis cedat tibi, pinus in hortis.
- M. Haec memini, et uictum frustra contendere Thyrsin.
 ex illo Corydon Corydon est tempore nobis. (70)

(コリュドーン) ネーレウスの娘のガラテアよ、私にとって、ヒュブラの立麝香
草より甘美で、

白鳥より色が白く、白い木蔦より美しい方よ。

草を食べ終えた牡牛たちが小屋に帰ったらすぐにいらして下さい、

貴方のコリュドーンを少しでもお心に掛けて下さるのなら。

(40)

(テウルシス) いや、むしろ貴方に私は、サルディニアの草より苦く、

エニシダより荒く、打ち上げられた海草よりもつまらぬものに見えますように、

もし私にとってこの一日が一年より長く思えぬのなら。

草を食べ終えた牡牛らよ、多少なりとも恥があるなら、家にお帰り。

(コリュドーン) 苔むした泉、そして眠りより柔らかな草よ、

(45)

そしてまばらな影であなた方を覆う緑のヤマモモよ、

暑さから家畜を守れ。今や焼けつく夏がやって来る。

今やしなやかな葡萄の枝にはつぼみがふくらんでいる。

(テウルシス) ここには炉辺と脂の多い松、ここには常にふんだんに火があり、

絶えることのない煤で黒い扉がある。

(50)

ここではわれわれには北風の冷たさが気にならない、

狼に羊の群れが、岸に急流が気にならないのと同じように。

(コリュドーン) ネズの木とイガに被われた栗の木がある。

果樹の下の至るところに、それぞれの果実が落ちて散らばっている。

今はすべてが微笑んでいる。だが、もし美しいアレクシスがこの山から

(55)

いなくなれば、流れですら干上がってしまうのが見られるだろう。

(テウルシス) 野は乾いている。空気の悪さゆえに、草木が渴き、死にそうだ。

酒神リーベルが丘で葡萄の葉陰を浚ったのだ。

われらのピュリスが来てくれれば、森全体が緑と化し、

ユピテルがまさに喜ばしき驟雨となって豊かに降り給うだろう。

(60)

(コリュドーン) ポプラはヘラクレスの犬のお気に入り、葡萄はバックカスの、

天人花は麗しきウエヌスの、月桂樹はアポロンのもの。

ピュリスははしばみが好き。ピュリスがそれを好んでいる内は、

天人花も、アポロンの月桂樹も、はしばみにはかなうまい。

(テウルシス) 森で一番美しいのはとねりこ。庭では松。

(65)

川辺ではポプラ。高い山では縦の木。

けれど、麗しきリュキダースよ、君がもっと頻繁に私に会いに来て

くれるなら、森のとねりこも、庭の松も、君には負けるだろう。

(メリボエウス) 私が覚えているのはこうした言葉。それにテウルシスが健闘空しく

敗れたこと。

以来、われらにとって、コリュドーンといえばコリュドーンという次第。

(70)